近畿支部

大学院生を中心とした学生委員会 通称「HAZAMA LAB.」を設立



近畿支部 学生委員会 岡本典子

■学生委員会設立の経緯

皆様も承知の通り、IIA近畿支部には、他支部同様に 以前より学生会員は在籍していましたが(例年近畿支部 学生卒業設計コンクール入賞者の方々にはJIA学生会員 になってもらっていました)、JIA側で上手くフォロー ができておらず、彼らの「活躍する場」が実質的になかっ たのが実情でした。このことは、本部でもたびたび議論 された課題であり、彼らが活躍できる場をつくることは 急務でした。そこで、私が支部長に就任した昨年6月よ り、学生会員の活躍の場として学生委員会を設立するこ とにし、この1年間、どのような活動が可能かを話し合っ てまいりました。 (JIA近畿支部支部長 津田茂)

■近畿支部学生委員会について

HAZAMA LAB.という名前の意味

卒業設計を頑張って乗り切り、無事に卒業したかと思 えば、気の休まる間もなく就職活動が始まる。そんな経 験をする大学院生は多いのではないでしょうか。不安や 戸惑いでいっぱいの就職活動は、進学してすぐにその存 在感を思い知らされると同時に、自分たちが社会への入 り口にいるという事実を認識させられます。

私たちは今、「そんなこと思ってもみなかった!」と言 いたくなるようなくらい一瞬で終わってしまう大学院 の2年間で、一体大学院生とは何なのか、ということを 探ろうとしています。卒業設計を乗り越えて、ただ「学 生」と表現するには物足りず、かといって「社会人」で もないまだまだ未熟な存在の大学院生。この状況を学生 と社会人の狭間にいると捉え、大学院生が集まったこの



Zoom会議の

学生委員会を、私たちは 「HAZAMA LAB.」と名付 けました。

さて、それでは大学院 生の存在意義ってどこに あるのでしょうか。それ はきっと、卒業設計で養っ た社会を見る目と、新鮮に 映る社会に対する学生的 図2 近畿支部広報誌『table』でも紹介 な視点・視野を使えること



なのではないかと私たちは感じています。それらを大事 にしながら活動していきたいと思います。

建築と社会の関係性を、 大学院生の視点から見つめるレビュー執筆

IIA近畿支部に所属されていた建築家の方々が現役を 引退されることで、行き場を失った価値のある大切な書 籍が数多くあります。JIAメンバーからのアドバイスも あり、その書籍を集め、学生が気に入ったら自分のもの としてよい「JIAライブラリー」とすることを想定して います。そしてそれらの書籍が、なかなか気軽には書籍 を購入できない学生の手に渡ると、世代を超えた知識の 継承につながります。それはまた私たちの次の世代へと 受け継がれる可能性を秘めた循環へとつながります。

こうした書籍を活用し、HAZAMA LAB.ではメンバー それぞれが気になった書籍のレビューを執筆する活動を 始めています。レビューにまとめた書籍の内容から、「建 築」と「社会」の関係性をダイアグラムに表現すること で見出していくという試みです。

菜をキーツールに

書籍のレビューは、いずれはHAZAMA LAB.メン バー以外の学生や社会人の方々にも書いていただける ような仕組みにしていきたいと考えています。そこで、 HAZAMA LAB.ではJIAライブラリーの書籍に"栞"を 挟み、それを循環のキーツールとすることにしました。 メンバー以外の皆様には栞を見て活動を知っていただき、



図3 レビューからダイアグラムを制作している様子

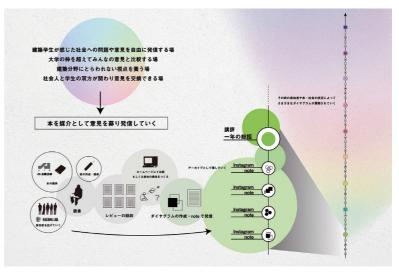


図4 HAZAMA LAB.活動の流れ

レビューを投稿することでこの活動に参加する、そんな 役割を棄が担ってくれることを期待しています。図4の 右側で円形が連なってつながっていくように表現してい る通り、書籍のレビューから生まれたダイアグラムを蓄 積してアーカイブしていくことで、この活動の真の価値 が生まれ、後から振り返った時に時代の流れを目で見て 実感できるものにしたいと考えています。

コロナ禍を超えてHAZAMA LAB.の活動に掛ける想い

コロナ禍により、以前のように活動できない事実は、世界中多くの人が共通していることです。例えば大学院生の私たちは、学生生活最後のわずか2年間というとても貴重な時間の中で、このような状況下となり、どうすれば社会に有効なものをつくり出せるだろうかと、暗中模索で過ごしてきました。しかし、不安な日々ではありましたが、人とは不思議なもので、環境が変われども成長はいつでもできるということを実感したのも事実です。コロナ禍の状況が私たちに危機感を抱かせ、HAZAMALAB.の活動を後押ししています。

危機感というとネガティブな意味が強い言葉ですが、人間にしか持つことができないとても大事な能力です。建築のけの字もわかっていなかった学部1年生の時に、奈良女子大学で現在もお世話になっている長田直之先生が、「技術が進歩し続ける世界の中で人間にしかできないこととは、意思と欲望を持つことだ」とおっしゃいました。意思と欲望というと前向きな言葉ですが、危機感というのも人間にしか抱けない感情・感覚のうちの、ものを創造する上で重要な感覚だと考えています。その言葉が私の中にずっと残っており、人間にしかつくれないものとは何かと考えながら卒業設計に取り組んでいました。「自分」にとことんこだわって、「自分」を詰め込んだ、つまり意思と欲望の詰まった卒業設計には、おそらく自分でも気付いていない自分が作品の中に込められていて、時間をかけてその創造の種に気づいていくのではと思う

のです。そんな大事な作品を卒業時につくるのは、世の中にモノをつくり出す類の専門を学ぶことでしかできなのではないでしょうか。その中でも建築は人間が過ごす空間をデザインする分野ですから、よりいっそう、建築学生の卒業設計は、学生自身にとっても社会に対しても、深掘りしていく価値のあるものだと考えています。

では、自身の卒業設計を乗り越えて、想像の種を持ち、深みが増した周囲の大学院生の皆さんは、どんな意思と欲望を持っているのでしょうか。さまざまな状況に挟まれたセンシティブな大学院生が中心となり、考えていることをレビューとして執筆し、ダイアグラムに表現することは、とても刺激的なことではないでしょうか。これからどのように活動が形になっていくのか、HAZAMA LAB.の活動をどのように伝えることができるのか、私自身も楽しみです。皆さんにもHAZAMA LAB.の活動を見守っていただけましたら幸いです。

思いがけない幸運

これまでに参加、運営してきた建築学生によるさまざまな活動においては、建築家の方々を講評者としてお迎えしたいと考えても、緊張や戸惑いでご連絡を差し上げるのに恐縮してしまうことが多く、なかなか近寄りがたいような存在でした。今回は想像もしていなかったJIAの建築家の皆様からのお声がけで始まった学生委員会ということで、大変嬉しく貴重な機会をいただけたことに心より感謝申し上げます。

●近畿支部学生委員会メンバー

尾石光(千葉大学大学院)、岡本典子(奈良女子大学大学院)、 鹿山勇太(大阪工業大学大学院)、中上和哉(神戸大学大学院)、 名富心(大阪市立大学大学院)、伊賀正隼(大阪市立大学大学院)、 上田雄貴(大阪工業大学大学院)、篠山航大(神戸大学大学院)、 周戸南々香(京都大学大学院)